

特245

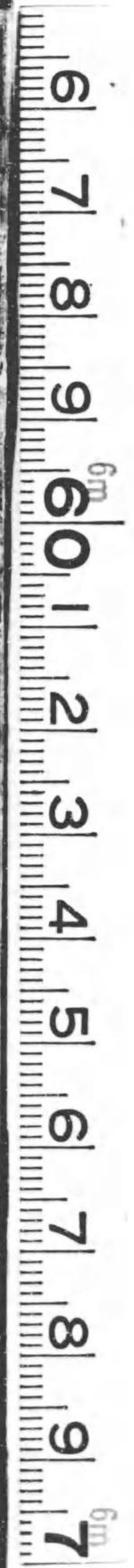
113

子松

と月



坊  
 主人  
 松月  
 画



始





特245  
113



曾我正堂 著

伊豫の松山と俳聖子規と文豪漱石



三好文成堂發行



Handwritten signature or mark on the right page.



Handwritten characters on the right page.



## は し が き

この「伊豫の松山と俳聖子規と文豪漱石」は、わが親愛なる伊豫路の旅人達の爲めに、われらの俳聖子規の松山における遺跡、文豪漱石のプロフィール、そしてその作「坊つちやん」の母胎たる松山中學につき、御覽の通り三題漸式に、そして興味本位に、いさゝか實用的に、これをくみ合せて編んだものです。

「松山における子規と漱石」、「坊つちやんモデル考」、「散策集」、この三つを相互に参照してお読み下さるならば、その郷土の俳聖子規居士といふものについて、また文豪漱石先生とその作「坊つちやん」の因縁について、この小冊子がくさぐさの、新しい知識と松山、道後御遊覽に必要な常識を、きつと諸彦の御期待以上に提供するであらうといふことを、わたしは出版者文成堂の老主人とともに確信いたします。

昭和十二年三月十日

正 堂 生 識



俳聖子規文豪漱石の家

目次

一、松山における子規と漱石……………一

二、坊つちちゃんモデル考……………五

三、正岡子規遺稿散策集……………三一





佛聖子規

幼少枯れ後  
子規







石漱豪文

少経程と並ぶべきか

冬木外漱石







紙用捺押フンタス



松山における子規と漱石



われらの俳聖正岡子規は、慶應三年九月十七日―陽曆十月十四日―の朝、松山城下藤原新町一名片町―現在新玉町三十三番地―にその呱呱の産聲をあげた。その父を御馬廻加番正岡隼太といひ、その母は藩儒大原觀山の長女で八重といつた。幼名處之助、後ち升と改む。諱は常規、明治二年、子規居士三歳の頃、湊町新町―現在湊町四丁目一番地―の中の川の住宅に轉居、明治五年三月七日、その七歳のとき父を失ひ、明治十六年六月十日、その十七歳の夏、東都に遊學するまで、母、妹、曾祖母と、ずつとそこに住まつてゐた。明治十八年の夏歸省したときも、やはりこの居士生立ちの家であつたが、明治二十年ごろに、母堂は西隣の大原家の假宅に一時假住居をされ、その夏居士が歸省したときは、その假住居時代であつた。翌年の五月母堂はさらに少々下手の湊町一丁目一番地にその隱宅を構へて、これに移轉され、明治二十五年の十一月に松山を引き拂ひ一家を擧げて東京に移住するまで、ずつとこゝに住はれてゐた。従つて居士が明治二十二年の夏と冬、二十三年の夏、二十四年の夏、二十五年の夏と前後五回歸省したのは、いづれもこの母堂の隱宅であつた。

その學友夏目漱石が、明治二十五年の夏、歸省中の居士を訪ねて來松、數日間滞在したのもやはりこの隱宅であつた。

文豪夏目漱石が、わが松山中學校の英語教師として着任したのは、明治二十八年の四月で、その後熊本高等學校の教授に榮轉して、わが松山を去つたのは翌年四月であつた。愛媛縣廳に現に保存されてゐ

る『中等學校教職員名簿』によると、つぎの通り記されてゐる。

囑托教員、八十圓、二十八年四月十日、文科大學英文科卒業、文學士夏目金之助、二十九年四月九日、依願解囑す

漱石先生が松中に赴任、まづ最初にその靴の紐をときたるは城戸屋旅館であつた。おそらく數日間城戸屋旅館にゐて、城麓愛松亭の津田保太郎の家に下宿、そこに一、二ヶ月ゐた後ち、さらに二番町八番地の上野義方老のうちへ轉宿されたものと思はれる。だから上野の家に下宿されたのは六、七月ごろであつたに違ひない。かくて翌年の春、熊本へ赴任さるゝまでずつとゐられたわけである。

子規居士は明治二十八年三月十五日、從軍記者として金州に赴く途中、郷里松山に立ち寄り、十七日廣島經由征途に上つたが、陣中病を發し、同年八月二十五日歸京の途次再び歸郷し、まづ大原家に一、二泊、その後は漱石先生と同居―漱石は二階に、子規は階下に―その秋十月十八日までずつと滞在したものである。

かくて文豪漱石は在松一年、後年うたゝ洛陽の紙價を高からしめた、その創作『坊っちゃん』の素材と構想を不知不識の間に自家藥籠中のものたらしめ、俳聖子規はまた、相つぐ嗜血に屈せず、蝕ばむその健康と闘ひつゝ、その郷土における新俳團松風會を熱心に指導し、いくたの小子規をそこに養成したのであつた。殊に彼れが漱石その他の俳友俳弟子達と、わが松山城下の郊外を吟行した、その自筆の散



策集が、最近その秘蔵者であり、また俳弟子の一人である近藤我觀翁によつて、ゆくりなくも世に發表されたといふことは、彼れ俳聖の最後の歸郷をいみじくも記念するものとして、非常に意義深く、よろこばしきことといはねばならぬ。



坊つちやんモデル考



夏目漱石の「坊つちやん」——それをわたしは、何回くり返し讀んだか知れない。最初は「ホトトギス」で、それから「鶉籠」で、「名作選集」で「全集本」で、幾度となく、くり返し巻き返し貪り讀んでゐるうちに、その主人公の坊つちやんをはじめ、山嵐も、赤シヤツも、うらなりも、野だも、狸も、その他作中の人物が、いつとなくわたしにすっかり實在の人となり、そしてわたしの無二の親友になつて了つたのであつた。

東京に歸つてから、「或る人の周旋で街録の技手になつた坊つちやんの初任給が二十五圓で家賃は六圓だ」とある。その坊つちやんももうよほどの年輩であらう。竹を割つたやうに單純で、一直線で、痛快そのものゝ如き坊つちやんも、その後すこしは世間ずれがして、無暗に癩癩玉を破裂させないやうになつたであらうか。可愛そうに、あれほど體こがれてゐた坊ちやんが、やつと東京に歸つて来てくれ、「玄關つきの家でなくても、至極満足の様子であつた」といふ下女の清は、その年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つたのであるが、その清の死後、坊つちやんは果してどうしたか。人なみにベターハーフを迎へたであらうか。

指折りかぞふれば、もう還曆を過ぎた坊つちやん、幸ひにして家庭圓滿で、坊つちやん二世のできがよく、東京の郊外で、初孫相手に樂隠居でもきめ込んでゐるであらうか。それとも老少不定、無常迅速、下女の清が遺言したやうに、「坊つちやんの來るのを楽しみに待つてゐた」その養源寺のお墓で、清と二人、在りし日の赤シヤツ野だ制裁の武勇談でもくり返してゐるであらうかなど、たわいないことをとりとめもなく考へてみたりもする。

二

閑話休題、坊つちやんファンのわたしは、相當根氣よく坊つちやん文獻をあれやこれやとあざつてをる、かつて大毎支局長時代には、「坊つちやん座談會」も催したり、その前伊豫日主筆時代には、中目覺氏などと、きどや旅館の漱石ゆかりの座敷で「漱石會」を開いたこともある。新聞や雑誌に現はれる坊つちやんのモデル談などは、眼の及ぶかぎり、切り抜いて保存してゐるが、そのなかには随分首肯のできないものもある。

かつて木村毅氏が「文壇モデル考」で坊つちやんに言及、  
漱石の坊つちやんもよくモデルのことで騒がれる作品で、なかんづく山嵐の數學教師が、しばし／＼詮索の種子になる。いまから十何年も昔に、遠足に行つて南京豆を買つたら、それが丁度同文館から出てゐた教育雜誌をほぐして作つた袋に包まれてゐて、それに四國の教育界總まくりのやうな記事があり、中に山嵐のモデル某先生が、世界的數學者である旨が確かに書いてあつた。その他でも類似の記事を再三讀んだ記憶かするが、改造の記者なる濱本浩の話の聞くと、あのモデルは、そんな世界的な



數學者ではなく、いま現に京都である中學校の教師をしてゐるといつてゐた。瀨本の嚴君といふのは丁度あの頃松山中學の体操教師をしてゐて、現に坊つちやんの中にも書かれて、あまりありがたくな  
い役割をとめてゐる、

とあるなども、木村氏は明らかに坊つちやんのモデルと山嵐のモデルを混同されてゐる。

三

創作「坊つちやん」は、元來寫實小説でもなければ傳記小説でもない、いはゆるモデル小説でないの  
で、そのモデルを詮索するのは、いさゝかよけいのことのやうである。それにもかゝらず、「坊つちや  
ん」の興味もしくば人氣の一部といふものは、やはりそのモデルに關係をもつてゐる。いひ換ふれば、  
それがわが松中の或る時代を描寫し、その時代の教室の空氣や學生氣質をいき／＼と描き出したこと  
ろに一種のチャームがあり、生命があるのだ。

しかしそのヒーローのモデルが誰れ、その端役のモデルが彼れと、それが終始一貫してゐるわけでは  
無論なく、その「手記」一政和先生消憶録で、坊つちやんのモデルの一人である弘中又一先生が言つ  
てゐる如く「數人一役、一人數役、分解綜合、取捨構成、手當り次第、遠慮會釋なく、むかしの同僚を  
モデルに失敬した」ところに、實はその津々たる面白味が存するのである。

四

かうした意味の下に、これからわたしは、やゝ詳しく「坊つちやんモデル考」を書きつゝゐる。まづ第  
一に「親譲りの無鉄砲で、子供のときから損ばかりして居る」といふ坊つちやんの生立ち一弱虫ヤイ  
と囃し立てられて新築の二階から飛び降りて腰を抜かしたり、親類の者から貰つた西洋ナイフの切味を  
自分自身の親指で試してみたり、山城屋の息子の勘太郎と取組討ちを演じたり、或ひは大工の兼公と看  
屋の角をつれて茂作の人蔘畑を荒らすなどの悪戯、それから「もと由緒あるものだったが、維新瓦解の  
ときに零落して、つい奉公までする様になつた」といふ、七年來召し使つてゐる坊つちやんの家の清と  
呼ぶ下女の話などは、おそらく漱石先生少年時代の体験もしくは准体験であらう。「漱石先生と坊つち  
やん」一大阪朝日新聞一は

漱石先生は、東京牛込喜久井町に生れたが、漱石先生の幼いときに清といふ下女がゐて、大變先生を  
可愛がつた。もちろん漱石先生は、親から碌な者になるまいなごといはれる様なことはなかつた。多  
勢の子供の末つ子に生れた先生は、兩親にも人一倍可愛がられたに違ひないが、先生が十三、四のこ  
ろ母に死に別れたそらだ。お母さんのない子といふので、下女の清は先生を無上に可愛がつたものら  
しい。寒い夜などひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間か寝てゐる枕元へ蕎麥湯を持つて來て  
くれたりした。便所へ行つて大事な財布を糞壺の中へ落した時、清は早速棒切か何かで拾ひ出して  
くれた。漱石が大分大きくなつてからも坊つちやん／＼といつてゐたそらである。



と記してゐる。もしこの記事をそのまま信ずることができれば、清のモデルは名もそのままに清といふ夏目家の老女中であり、坊つちやんの生立ちそのものがまた漱石先生のそれだといふことになる。

##### 五

「ふうといつて汽船がとまると、解が岸を離れて漕ぎ寄せて来た。見るところ大森位な漁村だ」とあるのは、もちろん三津濱である。漱石先生の時代にはまだ汽船は高濱に寄港してゐなかつた。それから「妙な筒つぼを着た男が来て、こちらへ来いといふからいつたら、港屋といふ宿屋へ連れて来た」とある。その港屋は多分當時の窪田であらう、もう一軒泉といふのもあつたが――

「停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱の様な汽車だ。ごろ／＼と五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ」とあるのは、むかしの伊豫鐵道、わが日本における輕便鐵道の元祖、松山三津濱間四哩余、おもちやのやうな汽車をいつたものであるが、それにして五分間ではつかなかつた、少くも二、三十分かゝつた。

##### 六

かくて坊つちやんが、二つの革靴とともに「威勢よく横附けにした」とある山城屋旅館が松山市三番町のきどや旅館、一名岱洲館ともいつた。「何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて

ゐられやしない。こんな部屋はいやだといつたら、生憎みんな寒がつてをりますからといひながら、革靴を抛り出したまゝ出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかいて我慢してゐた。女が来て湯に入れといふからざぶりと飛び込んで、すぐ上つた。歸りがけに覗いてみると、涼しそうな部屋が澤山あいてゐる。失敬な奴だ、嘘をつきやがつた」。それから坊つちやんは「道中をしたら茶代をやるものだと聞いてゐた。こんな狭くて暗い部屋へ押しこめるのも茶代をやらないせいだらう」と、五圓札一枚茶代に抛り出して學校に出かける。そして歸つて来ると、「帳場に坐つてゐたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出して来て、御歸りと板の間へ顔をつけた。靴を脱いで上がると、御座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五疊の表二階で大きな床の間がついてゐる。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へ這入つたことはない。この後いつ這入るか分らないから、洋服を脱いで浴衣一枚になつて座敷の真ん中へ大の字に寝て見た、いゝ心地である」とある。これは大体漱石先生自身の体験を書けるものやうである。

これについて弘中又一先生の「手記」はかう記してゐる。

今山嵐君と歩きながら前日漱石が下宿をかはれと忠告した話をする、アハ、と腹をゆすつて、それは夏目君が自分の体験から割り出したのだ。話はかうである。君が今ゐる城戸屋の竹の間は一名試験室と稱し、城戸屋の憲法として、素性の知れぬ風來坊はまづその試験室に抛り込んで置いて、翌



日愛媛新報の辭令欄から、その客の俸給高を發見し、然るのち身分相當の室に換へる仕組である。夏目君も初夜はやはり試験室に抛り込まれたが、翌朝の新聞に月俸八十圓下賜と出たので、校長様より上の御方、これはとおかみさんがびつくり仰天、すぐ新館一番―十五疊―に祭り上げて、ちやほやと手の裏返す優待に、夏目君もびつくり仰天、行末が恐ろしいと早速荷物を纏め。中村色男君が何かの世話で、いかもの屋銀次の家引越した。出る時ソラ茶代だと手の切れるやうな十圓札を無造作に抛り出したら女中もびつくり仰天、家内總出で店先に低頭平身して送つたといふこと。そりやそうだらう、場末の宿屋では十七錢から二十錢、松山第一等城戸屋旅館の宿泊料一等一泊五十錢だから、十圓はその二十倍に當る莫大な額である。君は月給二十圓だから大丈夫心配はない。アハ、と笑ひつゝけた。四辻で山嵐君に別れて城戸屋旅館に歸ると女中が、竹の間は御騒しいけれ、紅葉の間に取り換へませうと薄暗い別室に案内した。宿料月額五圓五十錢。ハハア憲法だなどと思ひ當つたが、この方が身分相當だ

とある。この前後までは、大体漱石先生それ自らの体験が織り込まれてゐるが、これからは、漱石の鬼瓦先生だつたり、弘中ぼんちのしつぽく先生だつたり、兩人一身、融通無碍、變通自在、ちやんぼんになつてゐるのでだん／＼やゝこしくなる。

七



「學校は昨日車で乗りつけたから、大低の見當は分つてゐる。四つ角を二三度曲つたらすぐ門の前へ出た。門から玄關までは御影石で敷きつめてある」とある。當時の松中は、いまの二番町の赤十字病院のところ、その正門は南側にあり、いまの藤の棚邊よりもちよつと東寄りであつた。そしてその正門から玄關までずつと花崗石を敷きつめた登道があり、その正面の建物の二階が大講堂、その階下の東端が校長室、それから書記室、なほ西側が教官室になつてゐた。

「名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある色の黒い、眼の大きな、狸の様な男であつた、やに勿體ぶつてゐた。まあ精出して勉強してくれといつて、恭しく大きな印の捺さつた辭令を渡した。この辭令は東京へ歸るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた」とある、この校長の狸は、住田昇といつて高師出で相當の人物であつたといふ。もちろん「狸」の第一印象は、漱石それ自らのインプレツシヨンであらうが、その辭令を丸めて海の中へ抛り込んだのは、實は弘中ぼんちであつた。それは「漱石を偲ぶ座談會」―大阪朝日新聞―で弘中又一氏自ら「徳島へ行きたいのを行かさなといふので、たうとう辭職したのですが、そして依頼免官の辭令を貰つたから、辭令を貰つた以上は、どうしてもいゝかといふと、どうしてもいゝといつたので、そんなら引き裂くといつて、引き裂いて鼻をかんだことがあります」と語つてをる。

因みに、夏目金之助囑託教員の赴任は、明治二十八年四月十日、弘中又一助教諭の赴任は同年五月二



十七日、その依頼免官の日はよくわからないが、漱石先生の依頼解囑が翌年の四月九日になつてゐるから、弘中助教諭も多分その前後であつたであらう。

それから狸校長が、教育の精神について長い講義を聴かした末、「生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくてはいかんの、學問以外の徳化を個人に及ぼさなくては、教育者になれないのと、無暗に法外な註文をする、そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舎へ来るもんか、人間は大概似たもんだ。腹が立てば誰れでも喧嘩の一つ位はする」と生一本の坊つちゃん「到底あなたの仰しやる通りにはできません、この辞令は返しますといふ」といふくさり、こいつは森次太郎氏の「坊つちゃんを讀んで」伊豫日日新聞によると、漱石先生それ自らの経験であるらしいが、しかし松中での話でなくその以前高等師範に奉職せしときの逸話だといふことである。なほ實は漱石先生の月俸は八十圓で横地石太郎助教諭と同額、住田校長が六十圓、西川忠太郎助教諭が四十圓、渡部政和助教諭が三十五圓、中堀貞五郎、中村宗太郎助教諭が三十圓、弘中助教諭が二十圓、高瀬半哉助教諭が十八圓、伊藤朔七郎助教諭兼書記が十二圓、左氏種囑托教員が二十圓、梅本忠朴助教諭心得が二十五圓、濱本利三郎履教員が九圓であつた。

八

「校長について教員控所へ這入つた。廣い細長い部屋の周圍に机を並べてみんな腰を掛けてゐる。お

れが這入つたのを見てみんな申合せた様におれの顔を見た。見世物ぢやあるまいし。それから申し附けられた通り一人々々の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。挨拶をしたうちに教頭のながしといふのがゐた。これは文學士だそらだ。文學士といへば大學の卒業生だからえらい人なんだらう。妙に女の様な優しい聲を出す人だつた。最も驚いたのは、この暑いのにフランネルのシャツを着てゐる。いくらか薄い地には相違なくつても、暑いには極まつてゐる。文學士だけに御苦勞ななりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる」とある、この「赤シャツ」のモデルが少々問題だ。

夏目、弘中兩氏の着任せる當時の教頭は「二つふくれた豚の腹」の西川教諭、札幌農科出の農學士で赤シャツを着てゐたことは確かだが、その性格や行動は、坊つちゃん「の赤シャツと全然相違し」色の白い大きな顔の笑ふときは女のやうにホ、と口を少さくする癖はあつたが、戀の鞘當をしたり、策を弄したり、人を穿入れるやうな陰險な小人物ではなかつたといふ。なほ横地、中村兩氏もまた當時赤シャツ黨の一人であつた。弘中先生の例の「手記」によると、山嵐の渡部先生が同氏と語つた言葉のなかに、

校長は高師出の狸爺でなか／＼喰へぬ男である。先年就任とともに、やはり高師出の沼福二郎といふ腹心を教頭として連れて來た。女のやうな聲をする氣障な奴で、年中緋ネルのシャツを着るから赤シャツと綽名をつけてやつた。尤も赤シャツは衛生にいゝといふ口實で伊達男の間に流行する。きちん



とネクタイを締めると殆ど人の注意をひかないけれど、料理屋などに行つて。御風呂は如何と促されたとき、上着を取りチヨツキを脱ぐと下から眞紅のシャツが現はれる。それが當世風流子の自慢である。君氣がつかなくたか知らぬが、今日の教員室にも赤シャツ連が三人ゐた。中にも英語教師中村色男君のシャツは相當華やかなものだが、あれは明朗暢達の人で、藝者は好きだが腹に毒はない。赤市松の西川は自分の親友、横地君の暗赤色は目に立たぬが、沼の赤シャツは特別の赤シャツで陰險極まりない。

云々とあるところから考へ合すと、おそらく中村、弘中氏あたりから注入された智識をもとに、前教師の沼福二郎氏の性格をモデルとし、それに中村、西川、横地などから得た、或る種のヒントを配合して創作したのが、けだし坊つちやんの赤シャツであらう。

弘中先生はその「手記」に、「傳説はふんだんに残つてゐるし、材料には事缺ぬと高を括つた漱石がいざ筆を執つてみると、哀しいかな、肝心の沼氏の容貌について何の智識もない、そこで手近の某、某、某氏をモデルとして赤シャツ君をつくり上げたと見える」とあり、また「好色方面では、英語の中村教諭が赤シャツのモデルをも勧めた」ともある。

九

それから「英語の教師に古賀といふ大變顔色の悪い男がゐた。大概顔の蒼い人は瘦せてるもんだが

この男は蒼ぶくれてゐる」とある、いはゆるうらなり氏、このうらなり氏のモデルもまたあまりはつきりしない。大分縣に轉任にきまつて、その送別會が梅酒家「坊つちやん」では花長亭で開かれたのは、實は圖書教師の石川恒年といふ先生であつたが、果してそれがモデルかどうか。弘中先生の「手記」では「中堀コツトリ先生がうらなりのモデルの半身だ」ともある。いかにも漱石先生の下宿の世話をしたりまたその性格から、或ひはそうかと思はれるふしもある。しかしコツトリ先生そのものは決してうらなりの肉體のもち主ではなかつた。

一〇

「夫れからおれと同じ數學の教師に堀田といふのがゐた。これは逞しい毬栗坊主で叡山の悪僧といふべき面構へである。人が丁寧な辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給へアハ、といった。何がアハ、だ。そんな禮儀を心得ぬ奴のところへ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主に山嵐といふ渾名をつけてやつた」とある。この「山嵐」はその描かれてゐる風貌性格から渡部政和先生たること實証明である。

つぎに「漢學の先生は流石に堅いものだ。昨日お着きで、嘸御疲れで、それでもう授業を御始めて、大分御精勵でーとのべつに辯じたのは、愛嬌のあるお爺さんだ」とある。これは左氏福先生、號は珠山である。それから「書學の教師は全く藝人風だ。べらくした透綾の羽織を着て、扇子をばちつかせて



御國はどちらでげす。え？東京！そりやうれしい、御仲間ができて私もこれで江戸ツ子ですといったこんなのが江戸ツ子なら江戸には生れたくないもんだと心中考へた」とある、この「野だいこ」のモデルは果して誰か。これにも異説紛々、「漱石先生と坊つちゃん」には、高瀬半哉だといつたり、石川恒年だと訂正したりしてをり。弘中先生の「手記」には、「極少部分ながら中村色男が野だの代役に出たこともある」とあり。森次太郎氏の「坊つちゃんを讀んで」には「野だといふ幫間的な人物は、送別會席上にて裸踊をしたことや、その他チョイ／＼梅木君のダークサイドを描寫してゐるやうにも思はるゝがこれも悉く梅木君でないことは説明するまでもない」とある。

一一

さて如上坊つちゃん初見參のインプレッションも結局夏目の鬼瓦と弘中のしつぽくの合流らしく、弘中先生はその「手記」につぎの如く記してゐる。

日露戦争も終つた三十九年四月ごろ、漱石が坊つちゃんを公にして、この松山一年間の事實を存分にすつば抜いたが大体あの通りである。只僕は同志社卒業で物理學校ではない。あれ以來僕を物理學校出と信ずる者が多く、同校出身者の會などに招かれて、一方ならず戸惑ひした経験があるが、物理學校を出たのは、同僚の數學教師安倍元雄といふ男である。數學教師といへば、同志社出といふよりも物理學校出の方が似合ふから、作者が一寸拜借したのであらう。僕が狸校長に連れられて、教員室に

一人々々辭令を見せて廻つたとき、六十七歳の左氏種先生が禮儀正しく、今日お着きで、嘸御疲れで大分御精勵で、今後は公私ともによろしく、とのべつ幕なしに辯じられて恐縮した。六番目が毬栗坊主、床屋では五分刈に刈つたのか知らぬが、それ以來一本々々獨立自由に、二、三寸垂直に成長して山嵐が怒つたやうな顔の持主を校長が紹介して、これが渡部政和君、數學主任ですといったとき、この坊主は天井に向つて、やあ君が新任の人か、チト遊びに來給へ、アハハと後に振り返つた。向ふから漱石がニヤリ／＼笑つて眺めてゐたが、その儘小説に書いてしまつた。

一三

「おい君どこに泊つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」以下、對山嵐交渉の坊つちゃんは、大體弘中しつぽくさんがそのモデルであるが、たゞ「君はいつまでもこの宿屋にゐるつもりもあるまい、僕がいゝ下宿を周旋してやるから移り給へ」と、山嵐の世話で「町はづれの岡の中腹にある骨董屋いか銀の家に下宿する坊つちゃんだけは漱石それ自身である。弘中先生の「手記」によると、

中村色男君が何かの世話でいかもの屋銀次の家に引き越した……いか銀の家に移つた漱石はその後かたの如く骨董攻めに會つて、茶を飲まされて、最後に毎日女房に足を拭かせるとのデマを聞いて中村色男君が教員室で披露したので、平素温厚の漱石もたうとう腹に据え兼ねて、即日同僚中堀貞五郎氏（うらな）の半身の世話で、歩行町の上野老夫婦の家に引越し、以後ずつと此處に落ちついた



とあり、このいか銀といふのは、いまの久松伯爵邸になつてゐる城麓の高みで、もと愛松亭といふ料亭であり、その後書畫や骨董を商賣にしてゐた津田安と呼ぶ親爺の住んでゐたうちをいふので、漱石先生の前任者のカメロン・ジョンソン氏も曾てこゝに下宿してゐたといふ。それから中堀うらなり氏の世話で轉宿した萩野實は上野といふうちは二番町の横町で文豪漱石俳聖千規同居の家として現存するいまの更科蕎麥の北隣である。歩行町といふのは全然間違である。

一三

それから教場における坊つちやんとその教授振りも大体夏目、弘中兩少壯教師の體驗をちゃんぽんにしたものと見て可なるべく、弘中先生の「手記」はつぎの如く記してゐる。

やがて二年の教場に出ると、大体小説にある通りのことが起つた。先生この問題を解決しておくれんかなもしとやられた。しかし新教師を質問攻めにするのは當時の流行で、僕自身も同社で盛んにやつた覚えがあり。前日漱石の注意もあつたから、その時義經少しも騒がず、待つてましたと即座に教へてやつたが、或る日の如きは、たうとう幾何の不能作圖問題を持出して來た。コンパスと定規では出來ぬ問題である。それでこれは不能問題であると思ふ。なほ考へてこの次ぎに答へてやるといつたら、うしろで生徒がわあと囁した。誰か一人手を打つて、出來ん／＼といふ聲が聞える。馬鹿野郎何を云つてる。不能問題なら釋迦でも孔子でも出來るもんかいと啖呵を切つて、教員室に歸つて山嵐君



に君こゝの生徒は分らず屋だといつたら山嵐君妙な顔をした

一四

「大町」の蕎麥屋で天麩羅を四杯平げた坊つちやん、翌日何の氣もなく教場へ這入ると、黒板一位な字で天麩羅先生と書いてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿々々しいから天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が然し四杯は過ぎるぞなもしといつた。四杯食はうが五杯食はうが、おれの錢でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと講義をすまして控所へ歸つて来た。「天麩羅問題は、もちろん弘中しつぽくさんがモデルである。その「手記」にはかうある。

僕が小唐人町と湊町一丁目の角のうごんやでしつぽくを四杯食つたら、シツボク四杯なりと黒板に書かれた。小説では漱石が自分の好きな天麩羅蕎麥に改めてる。自分のしたことを笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがなもしと警句を吐いたのは、お婆と綽名のある松本博邑といふヤンチャ坊で、その後日露戦争の際三百万圓の成金となつた。

とあり。大町すなはち大街道の龜屋うどんがその材料になつてゐる。ところが當時の龜屋うどんは、「手記」にもある通り、大街道と湊町の交叉点で、湊町の方に面してゐたといふことである。大街道にはいまの新榮座の向側に石風呂と稱するうどん屋があつたそらだ。漱石先生が行つたのは多分この石風呂の方だらうとのこと。こゝでもモデルがチャンポンになつてゐるやうだ。



つぎは住田温泉すなはち道後温泉の團子事件と湯の中で泳ぐべからずの一件。こいつはどうも漱石先生自身の体験談のやうで、弘中先生の『手記』は

漱石は道後遊廓の門の右で湯晒團子二皿食つて五錢拂つた。やはり黑板に書かれて、遊廓の團子ウマイ／＼と御丁寧にポンチ繪まで添えられたが、團子がよほど甘かつたから五錢では安いと思つたか、小説で七錢に値上げしてゐる。反對に城戸屋では茶代十圓（今の百圓）氣張つて江戸子の氣前を見せつけたまではよかつたが、考へてみると惜かつたのか小説では五圓に負けさせた。それ位の改竄は作者の筆の冴えであり、彼れこれせんさくするは藝術の冒瀆であるそらなとある。

それから坊つちちゃん初めての宿直の夕、ぶら／＼外出をするゝ狸と山嵐に出くはす一條、ついで同夜のバツタ事件、教員會議となるのであるが、そのモデルは大休弘中しつぽくさんで『道後温泉に行き、その歸りに狸校長と山嵐に會つたのも事實であり、また會議の模様も一から十まで微に入り細を穿つて有りしが儘に述べてある。僕はあれを讀んで漱石の記憶力と筆力とに驚いた』としつぽく先生その『手記』で懺悔してゐる。

松中のバツタ騒動といふのけ坊つちちゃん赴任前の出來事、これに伊藤舎監の宿直室飲酒問題を織り交

せて職員會議にまで發展させたのが『坊つちちゃん』のテーマ。『堀田山嵐』の渡部政和先生も『坊つちちゃん後日物語』—大阪朝日新聞—に

バツタ事件は先生が赴任される以前にあつたことで、有名なものですから先生も話を聞かれて『坊つちちゃん』の材料とされたものでせう。伊藤舎監が宿直室で酒を飲まうと企てたことを生徒が騒ぎ出し伊藤舎監に辭職勸告書を送つたことも事實だが、漱石先生は松山中學在任中一度も職員會議には列席されなかつたと思つてゐます。

と語つてゐるが、弘中先生の『手記』はつぎの如く、少しその内容が相違してゐる。

平素生徒から反感を抱かれてゐた某舎監が、同夜消燈時間後、賄に酒肴を命じて舎監室で大白を滿引してござるところを四年級長今井嘉幸氏に發見せられ、飲まぬ存せぬと主張したが悪かつたので、辭職勸告やら應援團の彌次やらで小説にある通り、寄宿舎全体の大騒となり刷毛序に宿直して道後に入浴するも不都合だといひ出したものがあつて、僕の寝てゐる本校宿直室の彼方でも万歳を唱へたそうだが、僕はグッスリ寝込んでゐて何も知らなかつたが、思ふに不都合といへば寝坊の方がよつぽど不都合で、まるで死人同様、泥棒や火事の用心に少しもなりはすまい。たよらない宿直であつた、バツタ事件はその數日前やはり反感を抱かれてゐた某体操教師宿直の夜、バツタ數百匹を蒲團の中に入れたそらで、それらを一括して菟藪版に刷つて教員會議に附せられたのである。會議か不得要領裡に終ら



うとする頃、山嵐君がすつくと立ち上つた。主任舎監で平素生徒と仲が良いから多分生徒を辯護するだらうと思ひの外、天井も振ふばかりの大きな聲で正々堂々の議論を吐いた。それはよいが二度目に立ち上つて、舎監室で酒を飲んだり、當直の日に温泉に行くのはわるいといつた。舎監は苦い顔をしてゐたが、僕は實際やり損つたと思つたから立つて悪かつたですとあやまつた。散會後山嵐君が僕に向つて、先刻は失敬アハ、とそり返つた。

そのどちらが事實か研究を要するが、「漱石を偲ぶ座談會」における横地赤シャツ氏の話では「バツタ事件の主人公は福田といふ体操教師だ」とある。なほ波部先生談の問題の伊藤舎監は、伊藤朔七郎助教諭で映画監督で名をなした伊藤大輔君の御尊父だと聞く。

一七

つぎは教頭の「赤シャツ」と「野だの吉川」と「坊つちやん」と三人で、「高柏寺の五重の塔が森の上に抜け出して針の様に尖つてゐる。向う側を見ると青島が浮いてゐる」あたりの海に釣に出かける場面であるが、「坊つちやん」のいはゆるターナー島の青島は、描寫されてゐる模様からたしかに四十島のやうであるが、「高柏寺の五重の塔」のモデルは果していづれか、太山寺か、石手寺か、おそらく作者の出まかせであらう。「あの岩の上にどうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ。いゝ畫が出来ますぜと野だがいふと、マドンナの話はよさうぢやないかホ、、、と赤シャツが氣持のわるい笑ひ方を



した。とある。その問題のマドンナといふ乙女は何ものか。漱石先生と坊つちゃんとは

その頃『松山美男美女番付』といふ一枚刷を無代で配付した者があつた。美女の部の大關は遠田といふ陸軍大尉の娘さんと某官吏の令嬢であつた。

とあり、弘中先生の『手記』にも

この會議にも赤シャツが出動してゐるが、あれはみんなモデル諸君で、眞正銘の沼赤シャツはすでに轉任した後であつた。マドンナはゐた。背の高い、モダンな、素晴らしい美人であつた。

とあり、大体そこらあたりで、『坊つちゃん』には遠田が遠山になつてゐる。一説には漱石先生が下宿してゐた上野老人の孫にあたる宮本よりえさん―醫學博士久保猪之吉夫人―がモデルだらうなどともいはれてゐる。

それから『露西亞の文學者のゴルキ』、これもゴルキではなく、ギゾがほんとうであるが、例によつて實際を超越、佛蘭西のギゾを露西亞のゴルキに換骨脱体させてゐる。

それからもう一つ、『一錢五厘の氷水事件』、これは事實にあつた問題だが、それも山嵐對坊つちゃん事件ではなく、漱石對中村色男氏のいきさつであつたらしい。弘中又一氏の『手記』は

一錢五厘氷水事件は漱石と色男との出入であり、従つていか銀下宿の世話も此人で、この二つは色男が山嵐の代役を買つた。彼れはまた教員會議でパイプを磨いたり、小説にある藝者小鈴事本名鈴子と

東京大学文学部  
図書印



関係があつたり、好色方面で赤シャツのモデルをも相動めたとある。

一八

かくて坊つちやんは下宿「萩野」に落ちつき、マドンナをなかに赤シャツ對らなりの戀の葛藤、花最亭における古賀うらなり先生の送別會となるのであるが、その送別會のモデルは、圖書教員石川恒年氏が大分縣の中學校に轉任することになり、その送別會が梅廻家で催された、その宴會らしく、中村色男氏の紀伊の國、左氏珠山翁の義太夫、梅木野だこ氏の日清談判破裂して等々、その夜の光景がそのままに「坊つちやん」に描寫されてゐる。

もと／＼うらなり對赤シャツの鞘當などは、作者架空の脚色と思はるゝが、高濱沖に横地赤シャツや西川豚の腹などと漱石先生が釣に行つたことはたしかな事實であり、それが一部モデルになつてゐるわけ、  
「漱石を偲ぶ座談會」で横地赤シャツ氏はつぎの如く語つてゐる。

どうも夏目君はあまり好まぬやうでしたが、連れて行かうといふことになつて、輕便鐵道で高濱にゆき、濱から船に乗つて、四十島と興居島の間が大變よく釣れる。とにかくかういふ風にして釣るのだといつて、西川がいろ／＼世話して釣方を教へました。暫らくしてゐるといふと、ぶる／＼つとかゝつて來た。引きあげてみると、何やら綺麗な魚がかゝつてました。ギョ、べらといふ魚です。喜んで

先生引きあげるなり手にもつた。なか／＼釣針をはなすことができない。西川が手傳つてやつてたうとう離した。そうしたところぬる／＼してるものだから氣もちがわるいもので、これは臭くてどうもえらいものを釣つた。これはいかぬといつて両手を洗つてみました。

一九

「この夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに、双方とも上品だ。爺さんが夜になると、變な聲を出して謠をうたふには閉口するが、いか銀のやうにお茶を入れませうと無暗に出て來ないから大きに樂だ」とある、萩野實は上野の主人はもと米九の支配人か何かをしてゐた背の高い老人だつたといふなほその婆さんの「唐變木て先生なんぞなもし」「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」の松山言葉がいかにもよく描かれてゐるが、これは漱石先生に頼まれて高濱虚子さんが、當時これに筆を入れたのだそうである。

二〇

それから練兵場における祝勝式後の對師範學校の大亂闘も大体事實であるが、たゞし練兵場での出來事ではなく、立見旅團長を八丁畷に歓迎した歸路の出來事だと「坊つちやん座談會」―大阪毎日新聞―で石原信順君や野本正三郎君などが主張されてゐた。弘中先生の「手記」にも

丁度日清役凱旋將兵の歡迎後釣瓶落しの薄暮から夕闇の中に敵呼方千余人、郊外から市内に修羅の巷



を現出した。やあい、と聲を呷らしてもやめればこそ、おしまいには義に勇む多数の教員までが渦巻きに巻き込まれた。体操教師濱本利三郎君が直径二寸長さ八尺ばかりの鉄の棒を苧殻の如く、カラン、カランと振り廻して、やあいと八双に構へたには、警官も色を失ふて思はず佩劍の柄に手をかけたが、幸にして鉄棒と見えたのは黒く塗つた鉄力の雨樋であつたから死人も何も出なかつた。漱石も僕も山嵐も相當に働いた。働いたといつても自慢するのではない。機を見てボカリと喰はしてサツと味方の陣に引き上げるのだから世話はない。働いた者は皆な無事だつたが、たゞ山口善太郎君といふ善良な英語教師が、働かずに停立して生徒を制してゐたら、眼のくらんだ敵方から田の中に押し込まれて踏まれ、蹴られ、どやされて着物はずだぐ、泥と血に塗れて翌日學校を缺勤した。

二一

いよ／＼大詰の赤シャツ、野だいこ征伐の壯舉であるが、これはおそらく漱石先生の純空想なるべく、その舞台が道後温泉といふだけで、どこがその古戰場やらモデルやら一向たわいが無い。坊つちやんと山嵐が循こもつた柵屋が、いま竹細工の土産物を賣つてゐる鳥屋で、その向ひの角屋とあるのもちろん角半であらう。その他「温泉の町をばづれると、一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃になる



それを通り越すと、こゝかしこに蘆葦があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る」とあるが、それに該当するシーンもちよつと見當らぬ。かつて催された「坊つちやん座談會」の結論は、いまの農事試験場のあたりへ、石手川と三津街道の並木をもつて来て配したものだらうといふことであつた。なほ「野芹川の堤」とあるのは、多分石手川の土手のことであらうが、「相生村の観音様」といふのは石手寺のお大師様のことかどうか、そこまで考証するのは野暮な詮索であらう。

三二

これでわが「坊つちやん」のモデルのせんさくはほゞ一段落であるが、最後に「坊つちやん前日譚」とでも題すべき「偉い狸校長の話」を弘中又一先生の「手記」からぬいてつけ加へて置く。堀田山嵐談―沼の赤シャツは在來の教員に難癖つけて學校にゐられぬやうに仕向け、代りに自分達の子分を引き入れる。あまりの悪辣さにあきれ返つて、或る送別會の席上で俺が轉任を大いに祝する。こんな動物園見たやうな所は君子の居るべき場所でない」と演説してやつた程である。期年ならずして教員の過半は狸・赤シャツの同類で固めて了つた。それで生徒が承知しない。終に發してストライキとなつた。形勢あの様になつてしまつた際には、一二氣骨ある教師がチヨイと小指の先を動かしたたけでもストライキはすぐ初まる。狸もいけないと見切りをつけて早くも切腹の覺悟をきめたものかまづ腹心の沼教頭をはじめ一旦入れた子分の面々を續々他校に榮轉させ、後任には誰の眼にも立派と見



ゆる人物を揃へた。沼の後任は横地君、英語は夏目君、後任招聘にはよほど眞剣に骨を折つたと見え夏目、横地兩君とも有名の仁だけあつて月俸八十圓、校長の六十圓より二十圓高い、君等はつまり學校騒動の尻拭ひ役である。名譽と思へといふ。僕はこれを聞いてこの狸は偉い狸だと思つた。沈みゆく船の船長、敗軍に自ら殿りする御大將の武者振り、劇としても悲壯の場面だと感に堪えぬが、果して數ヶ月、子分の始末が完結するや否や自己の就職には目鼻もつけず、即座に官を辭して松山を去つた。

散 策 集

明治二十八年秋正岡子規



明治二十八年九月二十日午後

子規子

今日はいつになく心地よければ、折柄來合せたる磯堂を催して、はじめて散歩せんとて愚陀佛庵を立ち出づる程、秋の風のそゞろに背を吹てあつからず、玉川町より郊外に出でける、見るもの皆心行くさまなり。

杖によりて町を出づれば稻の花  
秋高し蕪舞ひしつむ城の上  
大寺の施餓鬼過ぎたる芭蕉哉  
秋晴れて見かくれぬべき山もなし  
秋の山松爵として常信寺  
草の花少しありけば道後なり  
高繩や稻の葉末の五里六里  
砂土手や山をかざして櫛紅葉  
砂土手や西日をうけて蕎麥の花  
蜻蛉の御幸寺見下す日和哉  
露草や野川の鮒のさゝ濁り



虫鳴くや花露草の晝の露  
 肥溜のいくつも並ぶ野菊哉  
 秋澄みたり魚中に浮て底の影  
 底見えて魚見えて秋の水深し  
 飛びはせで川に落ちたる鱗哉  
 蓼短く秋の小川の溢れたり  
 元山をこえて吹きけり秋の風  
 五六反叔父がつくりし糸爪哉  
 馬の沓換ふるや櫛の紅葉散る  
 六尺の竹の梢や鴝の聲  
 土手に取りつきて石手寺の方へは曲りける  
 野徑曲れり十歩の中に秋の山  
 ほし店の鬼灯吹くや秋の風  
 南無大師石手の寺よ稻の花  
 二の門は二町奥なり稻の花



山門の前の茶店に憩ひて一椀の澁茶に勞れを慰む

駄菓子賣る茶店の門の柿青し

人もなし駄菓子の上の秋の蠅

裏口や出入にさはる稻の花

橋を渡りて寺に謁づ、こゝは五十一番の札所なりとかや

見あぐれば塔の高さよ秋の空

秋の山五重の塔に並びけり

通夜堂の前に栗干す日向哉

大師堂の縁端に腰うちかけて息をつけ、其側に落ち散りし白紙、何ぞと開くに、當寺の御圖二十四番凶とあり、中に『病事は長引ん命にはさはりなし』など書きたる、自ら或身にひし／＼とあたりたるも不思議なり。

身の上や御圖を引けば秋の風

山陰や寺吹き暮るゝ秋の風

寺を出で、道後の方に道を取り歸途につく

駒とめて何事問ふぞ毛見の人

芙蓉見えてさすがに人の聲ゆかし  
にく／＼と赤き色あり唐辛子

御竹藪の堀にそふて行く

古濠や腐つた水に柳ちる

水草の花まだ白し秋の風

秋の山御幸寺と申し天狗住む

四方に秋の山をめぐらず城下哉

稻の香や野末は暮れて汽車の音

雞頭の丈を揃へたる土堀哉

補

稻の香に人居らずなりぬ避病院

秋風や何堂彼堂彌勒堂

護摩堂にさしこむ秋の日脚哉

明治二十八年九月二十一日午後

子規子

稍曇りたる空の雨にもならで、愛松、碌堂、梅屋三子に促され病院下を通りぬけ、御幸寺山の麓にて



引返し来る、往復途上口占

秋の城山は赤松ばかり哉  
牛引くや毘沙門阪の秋の暮  
社壇百級秋の空へと登る人

常樂寺二句

狸死に狐留守なり秋の風  
松が根になまめき立てる芙蓉哉  
帚木の帚にもならず秋暮れぬ  
ところへ家かたまりぬ稻の中  
稻の花四五人かたりつゝ歩く  
道の邊や荊かくれに野菊咲く  
堂崩れて地藏残りぬ草の花  
道ばたに蔓草まふ木槿哉  
叢やきよろりとしたる曼珠沙花  
蓼の穂や裸子桶をさげてゆく



秋水二句いづれにか定め待らん

静かさに磔うちけり秋の水  
 投げこんだ磔沈みぬ秋の水  
 山本や寺は黄檗杉は秋  
 畫をかきし僧今あらず寺の秋  
 秋の水天狗の影やうつるらん  
 松山の城を戴せたり稻むしろ  
 稻の香の雨ならんとして燕飛ぶ  
 秋の日の高石懸に落ちにけり  
 草の花練兵場は荒れにけり  
 武家町の畠になりぬ秋茄子  
 人もなし杉谷町の簀の秋

明治廿八年十月三日

子規子

前月の末より日毎く雨のみふりまさりたるが、二三日は逆上の氣持にて、寢つきつ、運座連俳  
 などに心をつからせしためにや、廿五日の朝鼻血したたかに出でたり、やがて血もとまりければ、其日



も例の如く連俳運座に暮らし、翌廿六日の朝は

逆上の人朝かほに遊ぶべし

など戯れしが、此日も前日の如く血おびただしく出でぬ、さりとて訪ひ來る人をごとわらん程にもあらねば、午後は連俳の衆に向ひかにかくと説きつ笑ひつする程に、ともすれば鼻血一滴二滴落つる事多く、つひこ一坐をことわりて、却りて人々に介抱せられなどす、廿七日はいさゝかながら鼻血時々やまず、此日より安靜を守りて臥し居りしが、廿八日には全くやみぬ、それより四五日を経て、天氣順にをさまると共に、我病も癒えたり、さらば例の散歩に出かけまほしくて、十月二日只ひとり午後より寓居を出で、藤野に憩ひ、大原にいこひ、そこより郊外に出でんとて中の川を渡り、八軒屋を過ぎ、汽車道に沿ふて石手川の土手に上る、道々の句

木槿咲く塀や昔の武家屋敷

朝顔や裏這ひまはる八軒家

大根の二葉に秋の日さしかな

眞宗の伽藍いかめし稻の花

瀧の觀音

線香の煙に向ふ蜻蛉哉

汽車道をありけば近し稻の花

浦屋先生村居の前を過ぎりて

花木槿雲林先生恙なきや

稻の花今津の海の光りけり

土手にそふて西すること二三町、焼場のわたりより監獄署の裏に出で、薬師の西より再び八軒屋に返る

代るく礫うちたる木の實哉

牛の群れて草喰ひ居る傍に曼珠沙花の影しく咲き出でしを

ひよつと葉は牛が喰ふたか曼珠沙花

四本五本はてはものうし曼珠沙華

草むらや土手ある限り曼珠沙花

砂川や浅瀬に魚の肌寒し

花瘦せぬ秋にわづらふ野撫子

馬士去て鷓鴣鳴て土手の淋しさよ

石塔の沈めるも見えて秋の水



豊年や稻の穂がくれ雀鳴く  
秋風や焼場のあとの卵塔場  
庄屋殿の棺行くなり稻の中

薬師二句

我見しより久しきひよんの木實哉  
寺清水西瓜も見えず秋老いぬ

明治廿八年十月六日

子規子

今日は日曜なり、天氣は快晴なり、病氣は輕快なり、遊志勃然、漱石と共に道後に遊ぶ、三層樓中天に聳えて來浴の旅人ひきもきらず

温泉樓上眺望

柿の木にとりまかれたる温泉哉

鷺谷に向ふ

山本やうしろ上りに蕎麥の花  
黄檗の山門深き芭蕉哉

道後をふり返りて



稻の穂に温泉の町低し二百軒

しる人の墓を尋ねけるに四五年の月日は北邙の山墳墓を増してついに見あたらす

花芒墓いづれとも見定めず

引き返して鴨溪の花月亭といへるに遊びぬ

柿の木や宮司か宿の門がまへ

百日紅梢ばかりの寒さ哉

亭ところく溪に橋ある紅葉哉

松枝町を過ぎて寶嚴寺に謁つ、こゝは一遍上人御誕生の靈地とかや、古往今來、當地出身の第一の豪傑なり、妓廓門前の揚柳、往來の人をも招かで、むなしく一遍上人御誕生地の古碑にしただれかゝりたるもあはれに覺えて

古塚や戀のさめたる柳散る

寶嚴寺の山門に腰うちかけて

色里や十歩はなれて秋の風

歸途街道の芝居小屋に立ちどまりて、漱石てには狂言見んといふ、立ちよれば今籠の半ば頃なり、戯れに一句づゝを題す



紅梅のちり／＼に敵逃にけり  
狂言止動方角

狂ひ馬花見の人を散らしけり  
能樂鐵輪

蠟燭にすさまじき夜の嵐哉  
狂言磁石

長き夜や夢にひろひし二貫文  
能樂安宅

剛力になりおほせたる若葉哉  
狂言三人片輪

三人のかたはよりけり秋の暮  
能樂土蜘蛛

蜘蛛殺すあとの淋しき夜寒哉  
小さくといへる役者の女ながらの天晴腕前なりけるに

男 郎 花 は 男 に ば け し 女 哉

明治廿八年十月七日

子 規 子

今出の霽月、一日我をおとづれて、來れといふ、われ行かんと約す、期に至れば、連日霖雨濛々、我亦褥に臥す、爾後十余日、霽月書を以て頻りにわれを招く、今日七日は天氣快晴、心地ひろくすが／＼しければ、俄かに思ひ立ちて、人車をやとひ今出へと出で立つ、道に一宿を正宗寺に訪ふ、同伴を欲する也、一宿故あつて行かず

朝寒やたのもとひ々く内玄關  
小栗神社のほとりに出づ

男 ば かりと見えて寒山子の哀れ也

稻 蔭 朝 日 わ づ か に 上 り け り

鐵 砲 の か す か に ひ 々 く 野 菊 哉

御 所 柿 に 雄 群 祭 の 用 意 哉

秋 茄 子 小 き は も の 々 な つ か し き

稻 の 穂 や う る ち は も の 々 い や し か り

六 尺 の 庭 に ふ さ が る 芭 蕉 哉

かねて叔父君のいまそかりし時、余戸に住みたまひしかば、我をさなき頃は常に行きかひし道なり、



御旅所の松、鬼子母神、保免の宮、土井田の社など、皆昔のおもかげをかへず、そよろなつかしくて  
鳩麥や普通ひし叔父が家  
をさなき時の戯れも思ひ出だされたり、竹の宮の手引松は今猶残りて、二十年の昔にくらべて太りた  
る體も見えず

行く秋や手を引きあひし松二木  
余戸も過ぎて道は一直線に長し

澁柿の實勝になりて肌寒し

村一つ澁柿勝に見ゆるかな

山盡きて稻の葉末の白帆かな

霽月の村居に至る、宮に降り松林を負ひて、倉戸前いかめしき住居也

栗の穂に雞飼ふや一構

鴨木に啼けば雀和するや藏の上

萩あれて百舌啼く松の梢かな

庭前の築山に上れば、遙かに海を望むべし、歌俳諧の話に餘念なく、午も過ぎて共に散歩せんとて立  
ち出づ



こゝは今出鹿摺とて鹿摺を織り出す處也

花木種家ある限り機の音

汐風や瘦せて花なき木種垣

海邊にイめば、興居島右に聳え、由利島正面にあたる、けふは伊豫の御崎も見えずとか

見ゆるべき御鼻も霧の十八里

夕榮や鱒の網に人ばかり

それより海岸にそふて、南に行き、東に折れて今出村を一周して歸る

鶺鴒や波うちかけし岩の上

新田や汐にさしあふ落し水

薯蕷積んで中島船の來りけり

濱荻に隠れて低し狂歌が家

俄かに風吹き起る

方十町砂糖木島の野分哉

稻の穂の嵐になりし夕かな

午夢肥えて鎮守の祭近つきぬ



## ◎城山松寶國◎

國寶松山城は勝山城また金龜城とも稱し賤ヶ嶽の七本槍加藤左馬助嘉明が築くところの天下の名城でその高さ一五〇メートル展望雄大近くは道後平野の丘群四國アルプスの連峰遠くは海波縹渺の瀬戸内海を見晴らし四季を通じて登山者を恍惚たらしむ

天主閣觀覽料

大人十錢 小人五錢

二十五名以上團體五割引

賤が家に花白粉の赤かりき  
山城に残る夕日や稻の花  
簾寺の釣鐘もなし秋の風  
夕暮に今出を出で、人車を驅りて森某を余戸に訪ふ、柱かくしに題せよといはれて  
紐干すや雞遊ぶ門のうち

席上一詩あり

雞犬孤村富 松菊三逕間  
南窓倦書起 門外有青山

直ちにその家を辭す

白萩や水にちぎれし枝のさき

車上頻りに考ふる所あり、知らず、何事ぞ

行く秋や我に神なし佛なし

點燈寓居に歸る。



伊豫へ

日本最古

天下の靈泉

道後へ

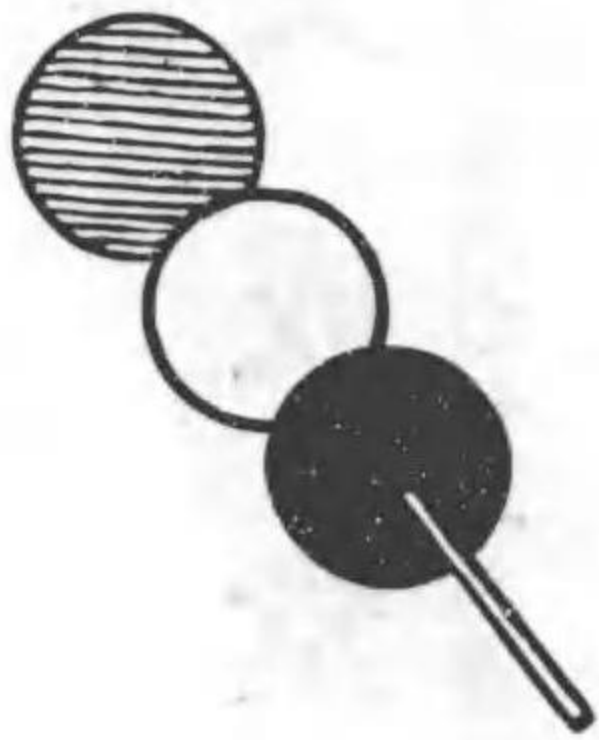
道後温泉

湯之町へ



漱石先生の坊っちゃんで

こても有名な……



坊っちゃん團子

伊豫道後湯之町

つぼや菓子舗

坊っちゃん團子の  
スタンプあり(無料押捺)

◎類似品ありつぼやに御注意 電話七二七番乙



愛媛縣立今治中學校教諭 景浦勉 著

# 伊豫海賊史話

定價 參拾錢  
送料 不要

松山藩軍師某家傳來

## 海賊城塞古圖

定價 貳拾錢  
送料 不要

## 伊豫海賊八幡船

〔模型置物〕  
〔解說書附〕

定價 八拾錢  
送料 拾四錢

## 全

〔繪ハガキ三枚組〕  
〔解說書附〕

定價 拾錢  
送料 參錢

頒布所 愛媛縣道後湯之町

# 三好文成堂

振替口座大阪四〇七二八番

伊豫史談會監輯

## 伊豫郡郷俚諺集

全一冊定價壹圓五拾錢 郵稅九錢

伊豫郷土史の完璧、地方無二の國寶的地誌、擬革裝禎、箱入美本、郷土史家の好同伴。

## 宇和舊記吉田古記

全二冊定價參圓 郵稅二十一錢

宇和島吉田兩藩史として、伊達藩主が領内各町村について普く舊記を採訪編纂せしめられしもの、宇和四郡の沿革並しこの書に盡く、四六版、レザー紙仕立、箱入美本

## 松山叢談

全四冊定價七圓 郵稅三十三錢

久松伯爵家御蔵板、原本三十一冊(附録共)、現存唯一の松山藩史にして、伊豫文化史と百科事典を兼ね、布表裝、帙入豪華版、殘部僅少

松山市府中町二丁目

## 發行所 豫陽叢書刊會

振替下關八五六三番

松山市勝山町愛國婦人會館内

## 伊豫史談會



369  
546

|               |                              |   |                   |
|---------------|------------------------------|---|-------------------|
| 樂山燒子規湯吞       | 五十錢                          | 送 | 料十錢               |
| 全柱掛           | 三十錢                          | 送 | 料十錢               |
| 俳句入子規手拭       | 一枚 十五錢                       | 送 | 料一反迄十四錢           |
| 漱石坊つちやん漫書手拭   | 一枚 十五錢                       | 送 | 料一反迄十四錢           |
| 子規漱石俳句短冊      | 一枚 十五錢                       | 送 | 料一枚三錢十枚以上送料無料     |
| 全色紙           | 大型一枚 十五錢<br>中型全 五錢<br>小型全 五錢 | 送 | 料一枚參錢<br>十枚以上送料無料 |
| ◎短冊・色紙種類十數種あり |                              |   |                   |
| 竹細工漱石猫        | 一ヶ十五錢                        | 送 | 料六ヶ迄拾錢            |

伊豫道後湯之町本通

文成堂三好商店

(振替大阪四〇七二八番)

昭和十二年四月五日印刷  
昭和十二年四月十日發行

定價貳拾錢

松山市府中町二丁目十四番地

著作者 曾我 鍛

愛媛縣溫泉郡道後湯之町一六七〇番地

發行者 三好源十郎

松山市本町二丁目四十四番地

印刷者 三好謙三郎

不許  
複製

松山市外道後湯之町

發行所 三好文成堂



終

